

観光を担う「人づくり」を語る



【出席者】

- 鈴木 茂 (松山大学 総合研究所所長)
 土井中 照 (フリーライター)
 永江 孝子 (南海放送報道制作センター放送部長)
 若松 進一 (元双海町教育長、観光カリスマ)
 前原 和子 (新居浜市観光協会事務局長)
 事務局 えひめ地域政策研究センター
 (発言順、肩書は実施当時のもの)

新しい観光の傾向について

鈴木 今日には観光における人づくりについてお話いただきたくお集まり願いました。手始めに、観光の新しい傾向で気づかれている点、またこれからの観光のあり方について、ご自身の経験なども踏まえてお話しいただきたいと思います。



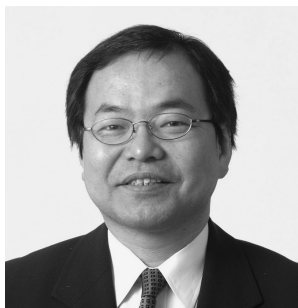
鈴木茂 (すずき しげる)

1988年より松山商科大学(現松山大学)経済学部教授。2004年より総合研究所所長。専門分野は財政学、地方財政論、地域経済学。観光についても、内子町のフィールドワーク等を通じて発言を続けている。

土井中 自分の経験からお話しします。今治やきとりの宣伝活動を進めてきましたが、こうしたやきとり啓蒙活動が全国に広まり、室蘭、福島、東松山、今治、久留米の全国5都市が集まって今年1月に全国やきとり連絡協議会(下記注)が結成され、全国的な動きに広がっていくという話し合いを持ちました。今年9月2、3日に全国のやきとりの街が集まり、味のプレゼンテーションも行う「やきとりサミット」を開催する運びとなりました。

これまでの経験で感じたことをお話しますと、まず「今治はなぜやきとりの街か」という「必然性」が大事です。今治というのはさまざまな観光資源が豊富ですが、そのなかでやきとりを生かしていくということによって『やきとり天国』という本を出し、注目されたわけです。まちおこしでは皆の意識をどう高めるかがメインになってきますが、そこに「情報」、「検証」を付け加えた。そこが注目されたのではないかと考えています。つまり、「情報」とか「検証」により、「価値」をはっきりとわかるようにすることです。それがよその地域とは違う「差別化」につながります。

また、もう一つは「わかりやすさ」と「意外性」。ど



土井中照（どいなか あきら）

出身の今治市で会社勤めのかたわら、さまざまな地域活動に参画し、1999年の瀬戸内しまなみ海道開通を期に今治市がやきとり日本一の街であることを実証した『やきとり天国』を出版。現在はフリーライター。丹念な資料検証と独特のユーモアに富んだ文体で知られる。

う注目されるかということです。きちっとした裏づけがあり、月並みではなく、少し変っていたり、面白くて、マスコミや観光客が飛びつく要素があったのが、皆さんに今治やきとりが注目された要因かなと思います。

そうした動き、進め方の中で、行政との連携をとって、行政主導によりやきとりの組合を作っていたいただいたということも大きかったですね。私個人がやきとり、やきとりと騒ぐよりは、団体や組織が動くほうが、より効果が現れるのではないかと思います。最終的には、やきとりの街で全国的な連携ができれば、より注目されるし、パワーが出るということです。

また、行動の中で生まれてくる、マスコミ、学術関係、組織関係の方など、さまざまな出会いがそれぞれのパワーを育て、増幅していく役割を果たしてくれます。

これらによってやきとりの街・今治が尻すぼみにならず、これからも発展していけるような形になった要因だと思っています。取り組んだのが1999年からですから、今年であしかけ7年になります。「継続は力なり」と言いますが、とにかく**続けることが大事**ではないかと思えます。

注 全国やきとり連絡協議会ホームページ

<http://www.yakitori-jp.com/>

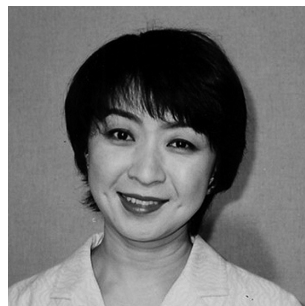
永江 私は観光を外から見ている立場です。

取材でずっと県内を歩いてみて感じることは、観光で愛媛の各地域が盛り上がっていくには、少し大げさかも知れませんが価値観の転換が必要ではないかと思います。

例えば、この間も収録で河辺に行ってきました。もちろん、ご高齢の方が多いのですが、出会うおじいさん・おばあさんごとに「何かいいものありませんか」「これからどこに行ったらいいでしょうか」と私たち尋ねるのですが、皆さん、開口一番「何もないよ」としか返ってこないんです。屋根付橋、空気、水、景観…ここにはいいものがいっぱいあるじゃないですかと言うんですが…。「何もないよ」ではなく、**景観や空気が売れるというような価値観**を広めていかななくてはと思います。

それと、それを広めていくリーダーが一人、二人と多いほうがいいのですが、**最初に種を蒔く人をつくる**ことが大事かと思っています。その人が育てば、皆にそうした価値観が広まっていき、内からも外からも人が集り、活性化の青写真を描いてこのようにしていきましょうとか、外にアピールするためマスコミを使いましょうとか、経済的な裏づけが必要だから販売所をつくりましょうとか、という話し合いができる、それが皆の輪になっていく…といった、いい循環が生まれるのではないのでしょうか。

その実際については、ここにおられるお三方はまさに実践してきたわけですから、「私がなぜ観光に目覚めたか」という「自分史」を語っていただくのがいいのかな



永江孝子（ながえ たかこ）

南海放送アナウンサー、報道技術本部局次長兼放送部長。15年以上にわたって放送が続く人気グルメ番組「もぎたてテレビ」の取材で、県内各地や近隣県を駆け巡る日々。これまでに会った店・食材・人は数知れず。

と……。(笑)

若松 今の傾向を見ていると、うちのまちへインターネットを見て来るんですね。変わった時代になりましたね。インターネット対応が進まないで観光の受け皿が進まないという時代になりましたね。自分もインターネットなんてと半信半疑でしたが、実際にいざインターネットをやってみると、これがすごい。本を読むよりも、電話するよりも早い。何でもありますよ。観光情報とは何か、どのように発信・受信するのか……。まず、この対応が重要になると思います。情報をいかに使うかが大切です。でも、どこも遅れていますよ。これからの決め手になると思いますよ。

それと、「スローライフ」の時代になってきたという実感があります。今までスローライフなんて正直戯れ言かと思っておりましたが、お金と時間のある団塊の世代が社会の中に送り込まれるという時代背景がある。ただ、そうした人たちはこれからはスローライフといいながら、何をしていいかわからないんですね。だから、そうした人たちに地域がスローライフをいかに提案できるかですよ。これが大きな節目になると思いますよ。その人たちに、観光という視点で何を提案できるか、「いっしょにやりましょう」、「ここに来ればこういうものがありますよ」と、ライフスタイルを提案することでしょうね。つ



若松進一 (わかまつ しんいち)

双海町役場で下灘駅のプラットフォームコンサート、双海シーサイド公園など「夕日のまちづくり」を主導してきた。退職後も、「水平線の家」で人材育成を実践するかたわら、講演に各地を駆け巡る日々。著作に『昇る夕日でまちづくり』ほか。ブログを開設中 (<http://www.yuuhi.jp/> から入る)。

まり「提案する観光」ですね。これはグリーン・ツーリズムにつながって来ます。

一方、地域に住む私たちの側は、地域資源とか観光資源って何？と聞かれても、永江さんがおっしゃったように「うちにはなんにもないよ」「水？あるけど売れないよ……」とかね。そのよさに「気付いていない」「気付かない」、いや「**気付こうとはしない**」んですよ。今、第一次産業が非常に疲弊しています。高齢化して、受け手たる人たちが農業から撤退していく、こうしたスローライフの回りにある人たちも含めて**地域の将来が見えない**、これが一つだろうと思いますね。

加えて、70市町村が20になったという広域合併が非常に大きいですね。今までは、ふるさと意識として双海町という何でもできていたんですよ。合併して伊予市になりましたが、「伊予市に何があるの？」という感じは否定できませんね。夕日と言ってもあれは元の双海町であって伊予市のじゃないよねと、焦点が絞りにくくなった。菊間も大三島も今治市になって、端々はどのように今治と係わっていくのか、観光という点で焦点は絞りにくくなっているのではという気はしますね。

こうした観光をめぐる社会の変化と人々の価値観の変化にどう気付き、そのうえで私たちはどう動けばよいのかと言うことを、一度整理をしてみる必要があると思います。そうすれば自ずとヒントが出てくるのではないかと思います。

私は田舎に住んでいますから、一次産業の1と2と3で6の6次産業でやっていかないと観光はうまくいかないと思います。例えば、この春、「逆手塾」という団体がうちに来たので500円でピワを食べてもらいました。ところが、ピワを採って食べるという行為は東京や埼玉から来た人たちには初めてですから、感動しましたよ。こうしたビジネスチャンスになることに農家の人たちには気付いていない。仕掛けようもしない。行政も「面倒くさい」、「土曜・日曜は休み」みたいなことで、土曜・日曜に人が来るといっても受け入れられません。もう一度観光のあり方と観光がもたらす地域への効果みたいなものを一度きちんと整理しながら、ではどうするかとい

う入り口を見極めることが大事ではないでしょうか。正直言ってそれが見えていませんね

私たちはずっとやってきた経緯があるからわかりますが、そうした人を見つけていけないといけない。まず私は入り口をきちんと整理して、これから観光がどうあるべきかを皆に知らせていくことだと思います。

前原 新居浜ですと20年間別子のバックボーンをいかした観光で活動をしてきましたが、やっと出番が来たかなと思います。というのは、今、日本観光協会ではフラワーリズム、グリーン・リズム、そして産業観光を三つの柱として動き始めています。産業観光推進協議会が2年前に発足し、各地で活動を進めています。観光協会も含めて全国観光フォーラムが5回6回と開催されています。商工会議所が全国的な規模で会議を開催したりといった動きがあります。産業観光は、先ほど若松さんがおっしゃったように、どんな観光で打ち出していくのかという目玉、もちろんやきとりもそうなのでしょうけれども、一つの特色のある目玉だと思います。

では、産業観光で何を見せるのかを考えた時に、新居浜の場合たくさんの分野を持つことができます。環境、地質、歴史、技術、経営学、携わった人であるとか、それぞれに興味のある方が来ていただけます。観光は「見せる」から、人々の口で語られたり、交流するようになるものになっています。来た人がその地で自ら何かをすると



前原和子 (まえはら かずこ)

各地を転々とした後、約20年前に故郷・新居浜市へ戻り、まちづくり活動に関わる。2000年から社団法人新居浜市観光協会事務局長、2001年から同理事・事務局長。新居浜市観光協会のサイトは<http://www.niihama.info/>。

か、逆に来た人たちが自分の感想を語るというのが可能ではないかと思います。新居浜の場合、互いに知っていることを出し合ったり、磨き合ったり、学びあったりするというのが可能です。

実は企画としていま寝かせているのが、新居浜が2000年に近代化遺産全国フォーラムを実施したのをきっかけに、新居浜で産業観光学芸員大学のような人づくりのシステムを組めないかと考えています。新居浜だけが仕掛けるのではなくて、中四国の地域の人たちが集って、それぞれの産業の分野で何を見せるか、新居浜の場合遺産として眠っていますけれど、たとえば今治の造船、タオルなど、今なら、「動いているもの」を見せることができます。今まで子どもたちの社会見学で、大手メーカーのビクターズハウスを見せていたんですが、それとも違ったものができそうなのです。

そして、互いに、行った地でどんな人たちに逢って、何を掴んでくるか、また何を語ってくるかという、価値観のすり合わせができるような場所がひょっとしたら新居浜に築けるかも知れない。それを引出すためのノウハウが必要だと思います。それは人づくりになってくるんでしょうけれど、聞く耳、しゃべる口を持った人…それが一人の人間の中になんかいないといけないですから。ともかく、そうしたことが新居浜で仕組めるかも知れない。

それと、若松さんのおっしゃった各地の特徴づけ、「うちのところに何があるのだろう」という点では、「新居浜にはこんなものがあるよ」と差別化できるものがあるのは大きいと思います。

行政枠との関係ですが、私は行政区画の枠はあまり信用していません(笑)。例えば、「松山に行った」「新居浜に行った」と都市名は出て来ますが、「愛媛(県)に行った」「香川(県)に行った」とはあまり言わないでしょう。双海も河辺も同じでしょうけど、**地域の個性、ブランドを見直す必要がある**と思います。

ただ、新居浜一つではだめ、双海も一つではだめ。滞在時間が短いからです。どこと組んでどのようなルートでというのも一つの勝負になってきます。四国の場合は全域で、新居浜など瀬戸内海に面している場合は海を越

えてどことつながっていくか、橋を使ってという大きなローケーションを持っています。

それで、誰に会うか、誰に来てもらいたいのか、**対象を明確にしないといけない**ですね。新居浜は(必ずしも)万人に来てもらいたいわけではなくて、胸に一物ある人とか(笑)、個々にいろいろ持ってらっしゃる人と交わりたいなというのがあって、選びたいなといったところ

鈴木 今後の観光のあり方を考えるに際して、まず、若松さんからご指摘がありましたのは、**地域がいまどのような状態にあるのか、基本的な検討が必要**ではないかという問題提起です。一朝一夕にはいかないと思いますが、平行して進めていく必要があろうかと思いますが、地域をとりまく環境が大きく変りつつあるわけで、少子高齢化はもちろん、いわゆる団塊の世代のリタイアなど、地域における生活スタイルが変化する可能性があるというご指摘ですね。

二つ目は、**地域、農山村、中山間地などの衰退が進行**してきており、**地域振興政策をどう結び付けていくか**という問題です。

三つ目は、市町村合併と観光政策との関連です。従来は国からの財政支援もあったわけですが、小規模自治体は小さいがゆえに一点集中・一点突破型の取り組みによって成功モデルをつくることができたわけですが、行政エリアが広くなり、自治体が大きくなってエネルギーを特定の地域や事業に集中することが難しくなったという環境の中でどのような対応が必要になっていくかということ。

それと、住民の意識としては、農林水産業が衰退している中で、**自分自身はその土地のよさに気付いていない**というご意見もありました。私も齢をとってきたせいか(笑)、この春、県内を車で走ってみると、緑の移り変わりが美しいと感動しました。緑があるだけで感動しました。こうした地域のよさ、魅力を発見して地域の人々に理解してもらおう人、さらに美しくしていくためには、従来の行政主導型から住民主導型に転換していくには

うすればよいか、住民の主体的取り組みを支援するコーディネーターやリーダーをどう育てていくかということが、これからの地域づくりにおいて問われていると思います。そういう意味で今日のテーマの「人づくり」がクローズアップされるのではないかと思います。

観光を担う人材について

鈴木 観光を担う人についてですが、観光は間口が広く、地域振興を担う行政、観光産業に携わる人材、観光に係わるボランティアやNPOなどの住民、次の世代と言う意味では学校教育など、いろいろな局面が考えられます。

自治体は公的資金を活用できる立場にあり、地域づくりを担う人材が居るなど重要な役割が今後も地域の観光産業振興においてあると思います。しかし、三位一体改革、市町村合併によって自治体を取り巻く環境が大きく変わりましたので、観光振興政策を今後どのように推進するのがよいのか、という問題が生じていると思います。例えば、内子町の場合、幸いなことに旧内子時代に、積み上げてきたものを新内子町に引き継げると見えますが、旧双海町の場合、率直に言って伊予市という大きな行政組織に吸収され、旧双海町時代の取り組みを継承するうえで、厳しいと思われます。旧城川町なども早くから「わがむらを美しく」というスローガンを掲げてがんばってきましたが、従来のムラおこしの成果を新しい行政の枠組みの中でどのように継承していくかということが問われていると思います。

そうしたことも踏まえてお感じになっていることをお話し下さい。

若松 私は「ジンザイ」には3種類あると常々言っています。「うちには何もない。来てもらっても困る」これは「罪」の「人罪」です。次の「人材」。「材」ということは、極端な話「いるだけ」ですよ。それを第三の「人財」、宝の「財」にかえていくことが人づくりではないかと思っています。

人づくりへの投資が必要なのですが、残念なことに、

行政に観光のわかる人が居ないんですよ。昔から、行政は観光と外交では食べていけないと言われてきました。しかし、これからはそれが大きな突破口になってくると思います。ただ、最近、行政改革や指定管理でこれまで各地でやってきたことと違った方向になっているような気がします。難しい局面を迎えています。

私は、観光を支えるには**トップが観光に目覚める**ことに尽きると思います。トップが観光という視点で考え、それをバックとして職員を変えていく、これはお金と情報が集まる行政レベルでやっていかないといけないだろうと思います。観光をバックで支えていく、**行政が観光の視点でいかに地域づくりを行っていくか**ということ、これが一つ挙げられますね。

たとえば、湯布院は民間主導ではありますが、中谷さんや溝口さんなど、人の存在が大きい。民間でも行政でも、これからは「罪」を「財」に変えていくことそのもの、地域づくりという視点で住民に気づかせる、そして結果的に経済的に潤い、自立を促していくという、観光からどのように自立というところまで結び付けていくかが要るのだらうと思います。

それをサポートしたり、そうした行き方に対して**助言のできる人を、愛媛県というレベルで僕は、持つべきだ**と思います。全国の先進観光地では県がそうした人たちを育成し、観光に目覚めていない人たちを誘導していくという人たちが居ます。県内にも10人くらい居れば、うまく回っていくのではないかと思います。市や町単位で人を育てることも大事ですけど、愛媛県全体という視点、今や県境を越えて行き来する時代になってくると、さら



下灘駅

に広い視野で見ていかないと、もう**20の市と町という枠組みだけではいけない**のではないかと思います。

鈴木 行政の人づくりということでお話があったわけですが、もう一つ突っ込んでお聞きしたいと思います。県でも市町村でも、通常職員は2年か3年で担当を替わるという仕組みになっており、そのために事業を推進する場合、一定の政策理念に基づいて継続することが難しい状況にあります。これに対して、双海町や内子町では例外的に、特定の職員が特定の事業に長くかわり、その成果が花開いているのではないかと私は考えております。素朴な質問ですが、若松さんは、「夕日のまちづくり」に長年携わってこられたわけですが、これは自治体行政の中では異例だと思います。この点についてご自身どのように考えられていますか。双海町ではそうしたことがどうして可能だったのでしょうか。

若松 たぶん、それしか取り得がなかったからでしょう。

ただ、トップは人を見ていうか、所属する部署は違いましたが、20年間ずっと観光ということに係わりがあるところに置いてもらったことが大きいですね。最初は観光という意識はなかったのですが、企画でまちおこしをしながら観光、産業課でまちおこししながら特産品づくりと、また地域振興課で観光のための組織づくりなどをやらせてもらいました。行政もこれからはプロフェッショナルをつくっていかないと。3年に1回替わることがいいことだ、それは悪いことしないからだと思いますが、20年間やっても悪いことはしてないつもりですがね。(一同笑)

長いことやるのはまずいという人事管理は改めて、これからは**観光で一生買っていけるような人を配置**していくようにしないといけないのかなと思います。

鈴木 それは特定の職員が特定の事業に長期間携わることのネガティブな面を見ているからですね。私もある人に聞いたことがあります、その人は言っていました。「僕はこだわっています」と。その人は他の部署の仕事

にあれこれ言うものだから、ある意味では役所の中では越権行為なのですが、ずっとかかわってこられたわけですね。現在の日本の行政組織の中では**こだわりをもってやっていく人が居ないと継続性は持てない**のかも知れません。現行の行政のシステムを変えて、事業担当者は企画段階からその結果が見える一定期間まで担当する。そして事業評価をするとともに、職員の業績評価も行なうという仕組みに変える必要があると、私は思っています。

若松 やっていますとどうしてもこだわりますから、こだわったら出る杭打たれて、役場辞めようかというところまで押し込まれないと本物はないですね。全国の地域づくりやっている人たち見てみると、観光的な視点ですけど、本当に僕と同じで変わり者ですよ。(一同笑)

人のネットワーク

若松 自分たちの仕事をやっていくうえで、マスコミを利用するといえば表現は悪いけど、そうした視点でやっていくとすごく広まっていますね。いくらがんばったって、1回のテレビとラジオと新聞には勝てないですから。そうしたネットワーク能力も、大切です。また、そうした**ネットワーク機能がないプロフェッショナルはありえません**から。そうした意味では長い間やることでしょうね。

鈴木 そうしたネットワークが途切れないようにすることも大事ですね。

以前に松山市の姉妹都市のフライブルク市でお尋ねしたことがあります。向こうは入庁後数年間色々な部署を回ります。向いた部署が決まると、それ以降は当該部門を継続して担当する仕組みになっているとのことでした。その結果、都市政策において非常にユニークで独創的な都市計画が実施されています。日本の場合も、重要な事業について例えば庁内から担当者を募集し、結果が出るまで、一定期間事業を担当させ、事業評価を行なうというような仕組みにすれば、個性的で独創的な事業が

できるかと思います。

中山間地の基幹産業は第一次産業ですから、**観光おこしは産業構造を多様化していく**意義があります。就業機会を多様化し、所得も発生する。それと女性を元気付ける効果もあります。農家の奥さんは補助的役割しか担って来なかった。農業経営において夫が計画したルールに従っていくしかなかったのですが、観光産業においては女性が主役です。

また、地域に小さいながら直売所ができ農産物のマーケットが地域にできるという効果もあります。農村において観光産業の振興にもっともっと取り組んでもらいたいなと思いますね。

イギリスに居た時に感心したのは、あれだけ国際競争力が衰退し老大国と言われながら、田園がよく手入れされていることです。小規模市町村を維持するために、補助金で支えるという仕組みがもちろんありますが、もう一つは観光で農村に行く、**都市住民が週末を農村で過ごすこと**によって国民全体で農村を支えるという仕組みがあることですね。

民の人材育成

鈴木 新居浜では民間の役割も大きいと思われていますが、前原さんいかがでしょうか。

前原 別子山は高齢化が進んでいますが、地域資源としてはものすごく豊かです。信州にも匹敵するような豊かな自然、特異な地質、歴史上の重要な役割など、材料としては非常にすごいものがあります。そこに何をもっていけば人が集まるのか、あるいは人が集まるのではなく、週末に行く所にするのか、今議論を始めているところです。行政に居られる若松さんみたいにカリスマ性のある人が居てくださると、ある意味では行政のトップも長い目を見て、人材を育てないといけないというふうになると思うので、そうした「**台風の目**」になる人をいかに引っ張り出して来て、その方とタイアップできる市民なり、民間団体なりがでてきて、外とネットワークをつくって

いくということでしょうか。

若松さんからネットワークというお話がありました。ネットワークは人にしかつかない」とつくづく思いますね。引き継ぐことができないんです。でも、そのうちの何%かは受け継げるというのもあると思います。紹介してもらった人がそのネットワークを広げていくしかないですね。「あの人がいるから信じてみよう」とか「あの人が言うから行ってみよう」とかすごく大きいんですよ。その部分は評価が難しいですね。例えば、行政の方で、こういう事業をしてこういう成果はありましたとは評価できても、事業をしてどれだけたくさんの人を知りましたと評定に書く欄は無いでしょう。でもそのほうが財産なのですね。民間ベースだと割に見えてくるんですよ。それを一緒に何とかできないのかなと思っています。

また、今、NPOが多くなっていますが、経済的にどこまで行けば収支が合うのかなという問題があります。今、新居浜で観光と言ってもそれだけでやっていけないのが現状です。でも、それは企業ベースで月給もらって生業をたてていくということを前提にしてのことです。そうではなくて、例えば、新居浜では別子の歴史に着目して子どもたちが学習したことを発表しに全国に出かけているというベースがあります。これからの団塊の世代は、本当にお金がほしいのかと言うとそうではなくて、自分のやりがいを求めていますので、知的好奇心の追求に関心が高いと思います。そうした人材を活用すればお金も少なくて済むため、ネットワークづくりとか



別子銅山の産業遺産（東平地区）

情報とかに回していただけるのかと思っています。そのおまかなビジョンづくりや、ネットワークの維持に行政のサポートが要るのかなと思います。

それと、今まで官と民と仕分けしていたのを、もっと「混ぜる」ことも大切ではないでしょうか。例えば、今年新居浜市では経済部長として民間の人に来てもらっています。これは一例ですが、もっとこうした事例がたくさん起こればいいですね。価値観というのは30年40年かけて作られたものですから、混ぜないと価値観は変わらないと思います。混ぜたのを目の当たりにして、自分が学んで、価値観として取り込まない限り変わるのは無理だと思います。そういう流れの再構築が必要で、それには人材を混ぜることがいいのではないかと思います。市町村の上は、県であったり、国であったりするわけですから、そうしたところから突発事例でいくつか落としただくと活性化するのではないかと思いますね。

鈴木 団塊の世代は日本を支えてきた人材ですが、ある意味では個性の強い人材ですね。そういう人たちがリタイアすると、築いてきたネットワークが消えてしまうという恐れはありますね。リタイアした人材を地域で活用していく工夫が必要でしょうね。

イギリスに留学中に、世界遺産に登録されたアイアンブリッジに2～3回行きました。もう観光地になっていますが、NPO団体が管理して景観を保存しています。イギリスだからできることも知れませんが、例えば別子銅山で週末過ごすというライフスタイルが定着すれば経済的にも、十分に成り立つと思います。日本の近代化を担った産業遺産として価値があるものですから。

土井中 やきとりの街づくりに携わるなかで、行政とかかわってきた経験から言えば、いかに行政のキーマンを捕まえるかでしょうね。やきとりの本を出すときに、行政の方をお願いしたことがあるのですが、いろいろ理由はあるのでしょうけども、なかなか出て来ないことがありました。担当者の心持ちひとつかも知れませんが、行政とのつきあい方はキーマンを捕まえるしかないのかな

と思いました。

行政がどうかかわっていくかというところで、目標設定が明確になるということはありません。もう一つは民間からのお金が集まりにくい時に金銭的なスポンサーとして活用の可能性があります。いちがいに行政はダメだとは言いたくないんです。要は人によりけりでしょうか。

「よそ者、若者、馬鹿者」とよく言いますが、「よそ者」として物事を客観視できる人がいることも大切だと思います。誇りを持つのはいいのですが、往々にして自慢になり過ぎて価値を持たないことがあります。やきとりの話で言えば、「うちの味はすごいでしょ」といわれるのに、食べてみるとそんなこともないものもある。こうした勘違いがなくなるともっとパワーが増すのにも思いますが、また、一方では大事なものを見落している。山口県長門市に面白いやきとりがあります。そのやきとりは、博多屋台風やきとりにガーリックパウダーをかけるという特異な文化がありますが、その土地の人は「やきとりとはそういうもの」と思っているからその価値に気付いていないんです。いや、今治の鉄板やきとりも同じですよ。今治の人間は鉄板で焼くものだ、やきとりとはそういうものだと思っている。かえって、よそへ行ってこれがやきとりですといわれれば、エッと驚く。どういうものに価値があるかを広い視野、高い視点で見ることも大事だと思います。

「若者、馬鹿者」は、破天荒なことのできる人。パワーも大切です。そうでなければ、牽引者としての人材は育たないと思います。パワーのある人たちをいかに見つけて、育てていくかが課題ですね。

さきほどから広域合併の弊害の話が出ていますが、今治の場合は、造船・海運、そして村上水軍の関連する街が合併し、テーマ性が強くなったことはプラスと思っています。これから活かしてしていかなければならないと思っています

永江 観光のもたらす地域への効果、これをくりかえし機会あることにPRすることが一番ではないかと思えます。それはあらゆる方向、例えば地域向け、マスコミ向

け、あるいはこれからのいろいろな計画書などにも反映させていくという形で、「観光が地域を元気にする」ということを広くPRすることが大切だと思います。これはオーバーなくらいやるべきだと思います。これは価値観を変えてもらうということなので、すごく時間がかかるかも知れませんが、根本になる柱ですので。鈴木先生がさきほどおっしゃったように観光で就業機会も増えるし、人が入ってくるということはこのような派生効果がありますということをしかりと、身近なところまで一度書き出されたらと思いました。

それと、これは企業でも同じでしょうけれども、私の経験から言うと、人づくりは成功体験の積み重ねだと思います。一番初めに成功事例をつくる、そしてそれを膨らませてあげること、成功させてあげるには時間とお金も要りますから、これは行政の場合予算ということになるのですが、その当たりの説得材料が地域へもたらす効果ということになると思います。これからを担う人、リーダーとなる人をサポートして成功させてあげることが大切だと思っています。

鈴木 学生と内子に調査に入って思うのですが、住民の方が元気ですね。役場の職員方も元気ですね。アンケート調査をしてみると、石畳地区の農家の約半分が空き部屋を持っており、空き部屋は平均して一戸に二部屋くらいあるんですね。観光に使える遊休化した資源があり、それを活用すれば農家民宿もできると思うんです。公設民営方式の「石畳の宿」もあり、地域の方が農家民宿の経営を経験し、様々なノウハウを蓄積していると思いま



内子・石畳地区の屋根付橋

すが、さらに一歩進んでほしいなと思っています。農家民宿に取組む意思があるかどうかを尋ねると、高齢化でやっていく自信がないという回答が多かったようです。ただ、町並博の影響でしょうか、70歳、80歳のおじさん、おばさん達が水車祭などに取組んでおられ、意識が変わってきていますね。

意識を変えよう

永江 先ほど前原さんがおっしゃった中で、「来た人が語るのも観光」というお話がありました。新しい価値で新鮮に感じました。普通、そこへ行って見るのが観光という通念がありますが、そこの人たちと語り合うことによって互いに何か広がって、新たな体験ができるのではと思いました。

そうしたことをフランクに語れる環境をつくることも大切だと思います。幸い、愛媛、四国にはお遍路さんのお接待の風習もまだ残っていると思いますし、皆さんそうおっしゃるので、そういうところを生かしていければと思います。ひいては経済的にも潤うということを皆さんに広めていったらと思います。

若松 最近思うのは、「知られた感動」では限界が来ているのかなということです。内子は観光の成功例としてよく紹介されますが、何か似たようなもの、見た事のあるようなものが並んでいるなど、ちょっと毒されてきて



石手寺にて

いるというか、悪い意味での観光産業に成り下がっているように見えるのが気がかりです。

自分は、まちづくりは「楽しい」「美しい」「新しい」をキーワードに考えてきました。これからは「知られた感動」ではなく、「知られざる感動」を求めていくことが大切ではないでしょうか。夕日で観光をやってきて、60歳で役場を退きましたが、これからはむしろ「壊す」「見直す」ことも大切かなと思います。そこで、自分への投資も兼ねて双海に「人間牧場」という水平線の家をつくり、五右衛門風呂、ツリーハウス、農場をつくることをこの一年やってきました。

意識を変える、価値に気づくという点では、双海の翠小学校をジャパハリネットのプロモーションビデオの制作に使ったことがあります。当時、自分は教育長をしていましたが、何考えているんだとずいぶん言われました。でも、その人たちに言ったんです。今の子どもたちの一番近い場所にいるジャパハリネットのようなプロモーションビデオは、ここでしか作れないものだからとね。県内の現役の木造校舎では一番古いという価値に気づこうとね。そうした地域の資源に気づくことです。

ただ、観光はイコール経済ということになってしまいがちですが、それよりもむしろ、心の充足が大切です。これからの観光は、心を揺さぶる、心の充足、癒しみたいなものだと思うし、それに誰が気付かせるかということ、観光というものを感ずる人がしないといけな。なにもしないと、「こんなもの観光になるか」で済まされてしまいますから。それが判る人、それが人づくりということでしょうけれども、それが基本だろうと思います。観光イコール経済ではなく、観光イコール経済プラス心の充足みたいなものが判る人がほしいですね。

事務局 若松さんが一つの「資源」になっていますが、では地域としてどうやって受け継いでいくかが課題になると思います。内子も、小国（熊本県）も行政の中から人材が出てきて、それをさらに行政の中で受け継いでいます。また、行政だから実現できることも大きいと思います。例えば、先の翠小学校の例も民間単独では実現は

難しかったのではないかと。そういう意味では、人による部分が大きいと思うのですが、どうやって受け継いでいくかでしょうね。

若松 振り返って思いますが、自分でも夕日のまちづくりはよかったと思いますが、自分が元祖だ教祖と言いつ張っても仕方ない。逆に、「夕日は素晴らしい」という人よりも、「夕日なんて」という見方が必要なのかなと思っています。その後新しい営みが生まれるわけですから。

前原 産業観光にかかわってみると、教育委員会の敷居の高さを感じることがあります。施設でも「観光施設じゃない」とおっしゃられるんですよ。敷居の高さを打ち壊せと思いますね。県内で**成功事例を見せない**と、**なかなか壁は壊れない**のではないかと。観光で人が育つわけがないと見られているようで、「観光」と言うと肩身が狭いんですよ。観光立国を国が目指しているにもかかわらず、下に下りていくに連れて「観光なんて…。私ら汗水出して働いているのに…。」なんです。「そうじゃあない」というところ、もっと大きな意味で、新しい産業であったり、大きなネットワークであったりというのを見せ、一番情熱を傾ける場所だと価値変換していただかないと…。

そして、**行政がビジョンを作り、そのもとに民間とか住民とかが協力して新しい何かが始まる**。そうするとワクワクするし、のめりこんでいく。**のめり込んだ人を一本釣りしていく**というプロセスがあると思います。そこからどれだけのネットワークを作っていくことができるか、そしてその人がどう育っていくかまでバックアップしていくかですね。**マニュアルがないのが人づくり**だと思います。

議論の場が大切

前原 若松さんの話を聞いていて感じるのは、「話し込める場」ですね。委員会にしても会合にしても、開かれ

た場、どんな意見でもたたかわせられる場が、行政の委員会でもほしいし、民間でも、地域に何ができるのかをトップも含めて議論できる場所、住民は住民でこのようなことをやりたいのだけれども、どこに働きかければ実現するかというような、**議論の場をあらゆるところで持って行く**。人の「たから」といわれるような「人財」が出て来るのはそこだと思います。

若い頃からの人づくり

鈴木 日本人は人前で発言するのを嫌うという傾向はありますね。大学の講義で指名して学生に、発言を求めると、後で叱られたりします（笑）。小学生までは先生が意見を求めると「はいっ」と手を挙げるのに、中学・高校になるとそれがなくなる。6年間人前で発言しない習慣が付き、大学に入っていざ「意見を言いなさい」となっても、発言できなくなっている。諸悪の根源は、どれか選べ式のペーパー入試にあると思いますね。自分のところを否定するような発言ですけれど…。

永江 今春から娘がニュージーランドへ留学していますが、カレッジに観光学部というのがあって、2年間かけて専門的に学ぶようになっています。聞いてみると、その学習プログラムの中に、実際に職場に行つて自分で企画をたてて実施したり、観光でこの地域を活かすにはどのような仕掛けが必要かといったことを考えるプログラムのようなのです。ニュージーランドは第一次産業と第三次産業しかないようで、ファームステイやファームビジットなどのプログラムを立てる人がたくさん居るのだそうです。

鈴木 日本はモノづくりで国際競争力を構築することに成功してきましたが、観光産業に政策の光があまり当たってこなかったし、研究もあまり進んでいません。大学で観光学部があるのは立教大学くらいのもので、最近やっと大学の中に観光産業の観光学科を設置する傾向が強まっています。私はイギリス留学中、バーミンガム大

学公共政策学部の都市地域研究センターに所属していましたが、そのスタッフのおよそ3分の1がツーリズム（観光）の研究者で、ずいぶん観光を重視しているなと感じました。街を回ってみますと、都心の再生を重視し、その一環として産業遺産を活用している。そして再開発プロジェクトをアクティブ・ラーニングに活用してありました。子どもたちをいわゆる校外学習で連れて行く、そこにはインストラクターが居て、子どもにレクチャーしたり、また子どもにコメントをさせたりして、まちづくりや観光の教育をしているんですね。

他方、日本の教育を見たときに、たとえば、総合的学習を支える仕組みができていないですね。総合学習の教科書がないから、先生方は大変困っています。総合教育の理念を活かすには、**地域で支える仕組み**があればいいんです。イギリスなどでは、美術館や博物館に連れて行けば、そこにインストラクターが居て子どもたちにレクチャーしてくれる仕組みになっています。校外に生徒を連れて行く場合、子ども6人に大人1人が同行するよう定められています。父兄が支援しますから、先生1人に負担がかかることはありません。このように校外学習を支える仕組みがあるんです。例えば、産業革命期の炭鉱のまちを再現した博物館がありますが、そこへ連れていくと当時の労働者の服装をしたインストラクターがボランティアで説明してくれます。このように**学校の外に受け入れる場がある**んです。

要は、**感動する機会をつくり、体験させる**ということが**大事**かと思います。観光は文化交流であり、学習だと考えられています。産業遺産を保全し、各々の地域の歴史や文化を学ぶ仕組みがあれば、子どもは自然に観光に興味を持つのではないかと思います。

土井中 いかにも人間性を豊かにしていくか、人間力をどうつくっていくかに結するということでしょうね。

鈴木 今日の日本経済は市場経済ですから、観光振興に成功すればする程、観光の商業化が進み、地域固有の歴史文化や自然景観が失われることといった事態も生じま

す。そこで地域固有の生活文化が保全され、都市と農村との持続的な交流が可能な観光のあり方を追求する必要があります。観光は交流であり、学習であります。**観光に来た人は地域の歴史文化や自然から学び、地元の人も観光客との交流を通して、感動を得るといった関係ができると、観光を切り札にした地域社会の維持可能な発展の道が拓けてくるのではないかと思います。観光は地域づくりであり、結局は人づくりである**と思います。

(2006年6月に松山市内で開催)